

琉球新報

2008年(平成20年)
10月15日 水曜日

THE RYUKYU SHIMPO

〒35842

落ち穂

※「落穂」とは、琉球新報紙の文化面のコラムで、今回は8回目の掲載分です。10名の執筆陣の中に施設長の三浦も含まれ半年間、計13回ほどの掲載が予定されています。紙面でご覧頂けない方にも読んで頂きたくニューズレターにて転載していききたいと思いますので、どうぞお付き合下さい。

十五年前、思い出すのも少し恥ずかしいくらい若いころ、そのころからダルクの回復率ほどの施設もだいたい三割で、その回復率をどうすれば上げられるかと、長期の追跡調査をしなければ簡単に回復率は出せないにもかかわらずダルク創設者の近隣に尋ねた事がありました。

一つの蜂の巣にいる蜂の三割はサボって居て真面目に働いている時は七割なのだそうです。十割の真面目な蜂だけの巣を創ろうと、このサボって居る蜂を追い出してまた三割はサボってしまおうというのです。またこのサボって居る蜂だけ集めて巣を創ると七割は働き出すのだそうで、ど

沖縄に在る

三浦 陽一
- 沖縄ダルク・チーフディレクター -

んなに移してもサボる蜂や真面目な蜂もいるのですが、つまり真面目な蜂が存在するために三割のサボる蜂が必要と言ったことなのです。そして、そのような事が藥物依

存証からの回復率にも当てはましているのだそうです。それに、ダルクのメンバーが行っていることは止めようとして薬を断とうと、逆に思い出してしまえば運搬されたから、自分に同じ経験があるこ

とを有効利用して未だ苦しんでいる依存症者を助けること、で自然に薬を使えない環境や状況を作り出す事なのです。やはりここでも未だ苦しんでいる仲間が必要なのです。

しかし、沖縄ダルクを後にして、白立していく仲間達は、ぜんぜん他府県よりも多い訳で、沖縄ダルクはこの「働き蜂」と考えている地域と比べたら「良くなって当たり前だ」と言うのは少し言い過ぎでしょうか？

※「イチヤリバチヨウデー」とは沖縄方言で「いちやりば」居れば「ちようでー」兄弟」ということで、一度出逢ったら皆兄弟だから仲良く付き合おうという意味です。